HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	相談を超えた相談活動
Author(s)	高橋, 彩
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 11, 5-6
Issue Date	2008-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45671
Type	other
File Information	BISC011_004.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

相談を超えた相談活動

臨機応変。留学生支援の場での関先生のお仕事ぶりを語るとき、その特徴の一つだと思う。こちらに困っている留学生があると、あちらから別のお話が入ってくる。「ちょうどよかった」とその「需要」と「供給」をつなぎ、二つのことを同時に解決する。舞い込んで来る事柄に、豊富なご経験を背景に、臨機応変に適切に対応していくのは、関先生の真骨頂であったと言っても過言ではない。

関先生との業務をめぐる会話では、先生が「ちょうどよかった」と仰る出来事が多かったように思う。私は当初、それは先生がいつも運が良いからだと思っていたが、いつのころからかそうではないと考えるようになった。この世の中、いつも運が良いなどということはない。少なくとも留学生支援の場では、運の良さはある程度必然なのだ。日頃から作り上げられてきた人的ネットワークや多くの留学生とのつながりが、その運を運んできていたのだった。

この仕事をしていると、「時間通りに」や「計画通りに」という考え方に縛られると厳しいと感じることがある。その「通り」に行かないということは日本的なやりかたからすると不都合な場合も多いが、先生はむしろそれを楽しんでおられるようであり、それ以上に、生かしておられた。多文化が共生するにはまさに「ちょうどよかった」と思えるようなその場に応じた対応と、日頃の努力が必要なのだった。

関先生は留学生相談を、いわゆる「相談室」を超えた活動として位置づけておられた。留学生をめぐる問題は、部屋の中だけで解決されるわけではない。あるときは留学生と一緒に出かけていって説明しながら通訳し、また別のときは学外の方々に協力をお願いすることもある。そのような現場に出て行く活動の中で、彼ら・彼女らの生活実態を知ることができる。それは次なる支援の方策を考えるための糧となる。

あるときこんな経験をお話し下さった。悩みを抱えてやってきたことがある留学生に、ある交流行事で出会ったとき、それまで見たこともないような明るい楽しそうな顔をしており、この人はこんな表情をするのかと驚いたという。相談に来たときの顔色がいかに「青く」、表情が暗いものであったかがその時わかったという。肌の色や顔立ちが多様な人々。それ以来、

できるだけ留学生が楽しんでいる時の顔を知るようにしているとのことだった。そうすれば、相談内容がどれほどその人にとって深刻なものか推測できるというお考えからである。

先生の留学生指導･支援は、受動態ではなく能動態であった。留学生たちの中に積極的に入って行き、ともに活動を楽しんでおられたのも、こうした先生の「相談室」を超えた留学生相談活動の一部だったのだ。

先生は留学生にも単なる支援の享受者や受動態のままでいるのではなく、能動的な存在になることを期待していた。異国で学究にいそしむ留学生は、地域や日本、世界に貢献することができる貴重な人材である。北海道大学留学生協議会（HUISA）の設立は、まさに留学生による留学生のための自律的な活動と相互扶助が行われるための「空間」作りであった。その空間は留学生たちが周囲の人々との能動的な関わりを通して、何かを学んでいく場でもある。先生は協議会の発足に心を砕かれた。

今でも、突然、飄々と留学生センターに入ってこられるのではないかと思うことがある。北海道大学留学生の学究生活がさらに心地よく、実りあるものになるように、日々、学生生活の各場面において、気を配っていくことが、留学生に携わる我々への先生が遺された大きなメッセージだと思う。故人のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

高橋　彩（留学生センター准教授）